

新社会人は社会をどのように捉えているのか

—勤務先で能力を活かすことへの自己評価の違いに注目して—

法政大学キャリアデザイン学部 教授 田澤 実
法政大学キャリアデザイン学部 教授 梅崎 修

1 問題と目的

(1) 背景

児美川 (2019) は、大学生の就職活動が若者たちを企業社会の秩序や支配的価値観へと従順に順応させる「予期的な社会化 (socialization)」の機能を発揮している可能性を示唆した。すなわち、就職活動を行う学生が、自分を押し殺してでも、目の前の現実に適応していくべきものと観念させられるため、企業社会の秩序や支配的価値観を相対化したり、批判的に対象化したりする契機がないことを示唆した。

また、児美川 (2020) は、大学におけるキャリア教育が、「職業社会」の構成員を育成するという意味での幅広さと奥行きを備えておらず、ダイレクトに「企業社会」へのエンプロイアビリティの養成に焦点化されていることを問題視し、学生の移行が社会的視野の広がりや欠いた移行となっている可能性を示唆した。

この点について実証的に明らかにするためには、大学がどのようなキャリア教育を実施しているのかという点に関わるが、それだけでなく、大学から社会への移行の際に、若者が「企業社会」としてのみ社会を捉えているのかどうかを明らかにする必要がある。

(2) 社会の捉え方を扱った先行研究

社会の捉え方に関連した先行研究にはいくつかの視点がある。社会関与の

程度を扱った場合、行動レベルについては把握できるものの、行動に至らない背景と考えられる意識レベルについて十分に把握ができない。また、社会に対する態度を扱った場合、「社会的にこうあるべきだ」という社会的望ましさが回答に反映されやすくなる恐れがあるであろう。それに対して、社会をどのように捉えているのかについて尋ねる自由記述分析を行う場合は、これらのデメリットを回避できる。

このような視点を導入した先行研究には下記のようなものがある。白井・安達・若松・下村・川崎（2009）および白井（2008）は、23歳から39歳までの若年者を対象に「私にとって社会は」という文章完成法を用いた調査を行った。これは、社会について人々への信頼という側面のみを測定するのではなく、「規範も含めた社会を大枠で捉える（白井ら,2009 p229）」ものであった。

白井ら（2009）は、社会について肯定または否定という一次元で捉えた。具体的には、社会に対する積極的なかわり、自分を支えてくれる基盤としての社会が明確に示される場合を「肯定」（記述例：「自己実現の場」「家族を守ってくれるもの」）、社会に対して否定的だったり、無関心であったりする場合を「否定」（記述例：「敵」「厳しい」）、否定ではないが肯定ともいえない場合、否定・肯定の拮抗が示される場合を「中位」（記述例：「職場」「甘辛い」）と分類した。そして、白井ら（2009）は、社会を肯定的に捉えていることが青年期から成人期にかけての社会移行を促すことを明らかにした。

白井（2008）は、文章完成法で使用頻度が多い語を抽出し、最終的に15のカテゴリーを見出した。そして、「自分」「生きる」「生活」などが多いことから、若年者にとっての社会は、自分がかかわるフィールドとして理解されており、それらには「稼ぐ」「職場」「家族」といった経済・生活的な空間、「ルール」といった秩序形成空間、「つなぐ」といった集合的空間があることを指摘した。また、一方では、若年者にとっての社会は、「学ぶ」「成長」「実現」といった能動的な自己変化、「つらい」「厳しい」といった社会からの受動的な評価、「わからない」「遠い」といった自己との距離感において捉えられていることも指摘した。

田澤（2021）は大学生3年生を対象にして同様の教示で文章完成法を用いた調査を行った。多変量解析による分析と白井ら（2009）および白井（2008）

の結果を参考にして作成したコーディングルールにおいて「協力」のコードがあらわれたことから、学生が社会を作り出す主体であると認識していること、また学生が社会に対して「難しい」という否定的評価も有していることを示した。

(3) 先行研究と本研究の相違点

先行研究と本研究の相違点は以下の2つである。

まず、対象者の違いである。白井ら（2009）および白井（2008）は23歳から39歳までの若年者を対象にしており、田澤（2021）は大学生3年生を対象にしていた。本研究では、大学から社会への移行期に焦点を当て、結果を比較検討する。年齢的には一部、白井ら（2009）および白井（2008）の対象者と重複するが、新社会人が社会をどのように捉えているのか明らかにすることは、学生が移行する際に社会的視野の広がりやどの程度であるのかについて議論する際の材料を提供できる価値があるであろう。

次に、エンプロイアビリティの養成に対する自己評価との関連を検討することである。山本（2015）は、景気動向等によって短期的に変化する可能性の高いエンプロイアビリティを客観的に測定することが困難であることを指摘し、エンプロイアビリティを、内部労働市場および外部労働市場における代替雇用機会の利用可能性の知覚（エンプロイアビリティ知覚）によって測定した。前者の項目例は「私の会社は私を組織にとっての財産と見なしている」などであり、後者の項目例は「もし解雇された場合は、すぐに同じ対価の仕事を見つけることができる」である。本研究では、前者が関連する。なお、本研究では、学校から社会への移行との関連を含めて検討するため、在学時に学んだことの視点を含めることにする。

(4) 目的

本研究の目的は下記2点である。第一に、新社会人が社会をどのように捉えているのかについて文章完成法を用いた調査から明らかにする。第二に、エンプロイアビリティの養成に対する評価との関連として、勤務先で能力を活かすことへの自己評価の違いによって社会の捉え方に違いがみられるのか

明らかにする。

2 方法

(1) 対象者

就職情報サイトのモニターである新社会人であった。2020年3月に大学を卒業および大学院修士課程を修了したモニターに対してアンケート調査を実施し、893名の回答を得た。これらのモニターは在学時に就職活動を行っていた者のうち退会者を除いた者であった。本研究では以下の設問にすべて回答をした651名のうち、初職を離職していた6名を除いた645名（男性328名、女性317名；学部卒461名、大学院卒184名）を分析の対象とした。なお、モニターの会員規約には、回答を「大学や研究機関と実施する共同調査」に利用する旨を記載してある。

(2) 調査時期

2020年10月12日から10月18日にかけて調査を実施した。社会人を半年ほど経験した時期に該当する。

(3) 用いた質問項目

①勤務状況

現在および4月1日時点の勤務状況を尋ねた。これらの項目によって本研究の対象者は初職を継続している社会人に限定された。

②私にとっての社会

先行研究（白井,2008；白井ら,2009；田澤,2021）と同様に「私にとって社会は」という文章を完成させるように求めた。

③勤務先で能力を活かすことの自己評価

「現在の勤務先では、あなたが大学や大学院で学んだことや、取得した資格、その他今持っている能力を活かすことができると感じますか」と教示し、「1.まったく活かすことができそうにない」から「5.十分活かすことができそう」までの5件法で尋ねた。

3 結果と考察

以降には、データ中に多く出現していた語を概観したうえで、先行研究（田澤,2021）のコーディングルールを参考にし、必要に応じて修正を加えることにする。その後、勤務先で能力を活かすことの自己評価によって新社会人の社会に対する捉え方に違いがあるのか明らかにする。

(1) 語のクリーニング

分析には、計量テキスト分析のためのフリーソフトウェア「KH Coder」（樋口,2004）を利用した。分析の準備段階として、漢字とひらがなが混在している語はどちらかに統一するように語のクリーニングをした。たとえば、「つながり」と「繋がり」の両方がみられた場合、「繋がり」に統一した。

(2) データ概要の把握

「私にとって社会は」に続く文章の平均文字数は8.38 ($SD=5.67$) であった。分析の第一段階として、データ中に多く出現していた語を抽出した。助詞や助動詞のようにどのような文の中にも出現する一般的な語を省き、データの内容をあらわすような語に注目した。上位80語を目安にしたところ、出現回数が3回の語までを採用して上位85語となった（表1）。なお、活用のある語は、基本形に直して取り出しているが、テキストに含まれる否定表現は独立して抽出した。その結果、「生きる」および「関わる」は肯定表現と否定表現がともに上位83語に含まれた。「生きる」は肯定表現を「生きる」（記述例：「生きていく」「生きられる」）と、否定表現を「生きる（否定）」（記述例：「生きにくい」「生きづらい」）と表記した。「関わる」は肯定表現を「関わる」と、否定表現を「関わる（否定）」（記述例：「関わりたくない」）と表記した。また、「分かる」は否定表現のみが上位85語に含まれたため、「分かる（否定）」（記述例：「分からない」「分かりません」）と表記した。

出現回数が最も多かったのは「場所」（106回）であった。次いで、「場」（57回）、「生きる」（52回）、「自分」（46回）、「生活」（38回）であった。これらの出現回数が多い語はおよそ先行研究（白井,2008;田澤,2021）と同様の結果であった。白井（2008）が指摘するように、社会は自分がかかわるフィールドとし

て理解される特徴があるのは、新社会人においても共通しているであろう。

表1 頻出語（上位85語）

抽出語	度数	抽出語	度数	抽出語	度数
場所	106	分かる(否定)	8	面倒	4
場	57	楽しい	7	貫う	4
生きる	52	関わる	7	様々	4
自分	46	経験	7	やりがいがいい	3
生活	38	大変	7	ツール	3
成長	37	一人ひとり	6	フィールド	3
お金	25	楽しむ	6	回る	3
人	25	環境	6	塊	3
稼ぐ	22	作る	6	外	3
人生	21	人間	6	学ぶ	3
世界	18	多様	6	関わる(否定)	3
社会	17	面倒くさい	6	関係	3
必要	16	価値	5	機会	3
貢献	12	居場所	5	幸せ	3
一部	11	広い	5	広げる	3
自己	10	支える	5	仕事	3
手段	10	実現	5	試練	3
存在	10	責任	5	時間	3
働く	10	力	5	自由	3
勉強	10	すべて	4	収入	3
理不尽	10	スキル	4	重要	3
金	9	可能	4	助け合う	3
繋がり	9	行く	4	人々	3
良い	9	思う	4	生きがいがいい	3
厳しい	8	集合	4	戦場	3
成り立つ	8	充実	4	敵	3
生きる(否定)	8	辛い	4	複雑	3
得る	8	不可欠	4		
難しい	8	豊か	4		

(3) コーディングの枠組み

分析の第二段階として、より詳細な分析を行うために、関連する単語同士を同じコードに分類するコーディングの作業を行った。なお、KH Coderによるコーディングは回答の中から要素を抽出するという考え方であるため、1つの回答であっても、複数のルールに合致すれば、複数のコードが与えられている(川端・樋口,2003)。以下、大分類は【】、コードは『』、用いられた語および記述例は「」を使って表記し、記述例で該当する語は傍点を記す。なお、以下には本研究で修正を加えた箇所に焦点を当てることにする。

先行研究(田澤,2021)のコーディングルールを参考にしつつ、データ中に多く出現していた85語について、語の本文中での使われ方を確認しながら、その語が含まれている場合に、主に【肯定】を示すと判断できる語、主に【中位】を示すと判断できる語、主に【否定】を示すと判断できる語を抽出した。どのような語とも一緒に使われうる語については抽出しなかった。コード、用いられた語および度数等を表2に示す。なお、結果を比較するため割合については田澤(2021)の値を併記する。

①肯定に分類されたコード

【肯定】に分類されたコードは『成長』『学ぶ』『繋がり』『協力』『楽しい』であった。

『成長』のコードで用いられた語をみても、「成長」「実現」「生きがい」であった。「生きがい」(記述例：生きがいを与えてくれる場所)は本文中での使われ方を確認し、本研究によって追加した語であった。

『学ぶ』のコードで用いられた語をみても、「勉強」「学ぶ」であった。なお、上位85語には含まれなかったが、「学び」「学校」はそれぞれ2語みられた。

『繋がり』のコードで用いられた語をみても、「繋がり」「関わる」であった。

『協力』のコードで用いられた語をみても、「貢献」であった。なお、上位85語には含まれなかったが、「協力」は2語みられた。

『楽しい』のコードは本研究で追加したコードであった。「楽しい」(記述例：

楽しいところ)、「楽しむ」(記述例：人生を楽しむ機構)、「幸せ」(記述例：みんなが幸せに生きる環境)は、社会に対する積極的なかわりを示している語と判断が可能であり、かつ、これまでの『成長』『学ぶ』『繋がり』『協力』のコードとは異なる性質がある肯定的評価と判断し、独立してコードを設けることにした。

②中位に分類されたコード

【中位】に分類されたコードは『稼ぐ』『職場』であった。

『稼ぐ』のコードで用いられた語をみると、「お金」「稼ぐ」「金」「収入」であった。「金」(記述例：金を得る手段)は本文中での使われ方を確認し、本研究によって追加した語であった。

『職場』のコードで用いられた語をみると、「働く」「仕事」であった。

『ルール』のコードで用いられる語は上位85語にはみられなかったが、「規則」と「秩序」がそれぞれ1語みられた。

③否定に分類されたコード

【否定】に分類されたコードは『辛い』『厳しい』『難しい』『分からない』『生きにくい』であった。

『辛い』のコードで用いられた語をみると、「大変」「辛い」「戦場」「敵」「面倒」「面倒くさい」であった。「戦場」(記述例：戦場だ)「敵」(記述例：敵である)「面倒」(記述例：面倒ながらも付き合っていかなければいけない環境)「面倒くさい」(記述例：面倒くさいものだ)は本文中での使われ方を確認し、本研究によって追加した語であった。これらは社会に対する否定的な評価であると判断した。

『厳しい』のコードで用いられた語をみると、「理不尽」「厳しい」であった。

『難しい』のコードで用いられた語をみると、「難しい」のみであった。

『分からない』のコードで用いられた語をみると、「分からない」「分からず」であった。「分からず」(記述例：いつになっても正体が分からず、明確に表せないもの)は本研究によって追加した語であった。

『生きにくい』のコードで用いられた語をみると、「生きにくい」「生きづらい」「生きていけない」「生きられない」であった。「生きていけない」（記述例：自分がいなくても回るけどないと私が生きていけない場）および「生きられない」（記述例：理不尽ではあるが接点なしでは生きられない苦行）は本文中での使われ方を確認し、本研究によって追加した語であった。

④コードの度数

作成されたコードの中で、上位を占めているのは「成長」(7.1%)「稼ぐ」(6.7%)「辛い」(4.5%)であった。大学生を対象にした田澤(2021)で上位を占めていたのは「成長」(8.8%)「厳しい」(5.2%)「辛い」(4.2%)であったことを踏まえると、新社会人と大学生は、「成長」といった能動的な自己変化、「辛い」といった社会からの受動的な評価の観点から社会を捉えている点では共通しているものの、新社会人になると「稼ぐ」といった経済的な側面で社会を捉えることに特徴がみられるといえる。

表2 コード、用いられた語および度数等

分類	コード名	用いられた語	度数	割合	参考 田澤(2021)
肯定	成長	成長, 実現, 活躍, 発揮, 生きがい	46	7.1%	8.8%
	学ぶ	学ぶ, 学び, 経験, 勉強	22	3.4%	1.7%
	繋がり	繋がり, 繋がる, 関わり, 関わる	18	2.8%	2.7%
	協力	協力, 助け合う, 作り上げる, 共存, 貢献	17	2.6%	3.5%
	楽しい	楽しい, 楽しむ, 幸せ	16	2.5%	
中位	稼ぐ	稼ぐ, 稼ぎ, お金, 収入, 給料, 金	43	6.7%	2.3%
	職場	職場, 働く, 仕事	13	2.0%	2.9%
	ルール	ルール, 秩序, 規則	2	0.3%	0.5%
否定	辛い	辛い, 大変, 不安, 苦しい, 息苦しい, 地獄, 面倒くさい, 面倒, 戦場, 敵	29	4.5%	4.2%
	厳しい	厳しい, 窮屈, 理不尽	19	3.0%	5.2%
	難しい	難しい, 怖い, 闇	10	1.6%	2.3%
	分からない	分からない, 分かりません, 未知, 分らず	9	1.4%	2.2%
	生きにくい	生きにくい, 生きにくさ, 生きづらい, 生きていけない, 生きられない	8	1.2%	2.4%

注1. 本研究で追加したコードおよび語に太字を施した

(4) 勤務先で能力を活かすことの自己評価による違い

勤務先で能力を活かすことの自己評価 ($M=3.12, SD=1.18$) の「1.まったく活かすことができそうにない」から「5.十分活かすことができそう」までの回答について、1または2と回答した者を「活かせない」群 ($n=204$)、4または5と回答した者を「活かせそう」群 ($n=258$)、3と回答した者を「どちらでもない」群 ($n=183$) として分類した。

勤務先で能力を活かすことの自己評価によって、社会の捉え方が異なるかについて明らかにするために、3つの群と頻出語との対応分析を行った。なお、対応分析とは、クロス集計を視覚化する方法であり、2つの変数を一緒に集計して関連性を分析する手法である(牛澤,2021)。また、対応分析は、原点(0,0)の付近に付置される語ほど取り立てて特徴のないことを示し、原点から離れている語ほど特徴的であることを示す(樋口,2014)。

それぞれ差異が比較的顕著な上位60語を分析に使用し、その中から原点から離れた上位50語を示すことにした(図1)。なお、対応分析を用いた先行研究では、すべての語について解釈をしているのではなく、分析者が注目した語を明示しながら、部分的に解釈をしている(e.g. 阪口・樋口, 2015)。図1においては、分析者が結果を解釈する際に注目した語が含まれるように点線の楕円を施した。本研究では、上述してきたコーディングルールに用いた語について主に注目することにした。

対応分析によって抽出された成分1の寄与率は58.8%であった。成分1において正の方向に「活かせない」群が、負の方向に「活かせそう」群が布置されていた。

「活かせそう」群に特徴的な語としては、「楽しい」「貢献」「成長」といった【肯定】に分類されるものが複数みられた。これらの語は対象者の回答で次のように用いられていた。

- ・「充実し楽しいもの」
- ・「能力を発揮し社会に貢献する場所」
- ・「生活のまわりにある、成長のための機会」

また、「活かせない」群に特徴的な語としては、「関わる」「経験」「勉強」といった【肯定】に分類されるものだけでなく、「辛い」「厳しい」「面倒くさい」「大変」といった【否定】に分類されるものや、「稼ぐ」「金」といった【中位】に分類されるものもみられた。これらの語は対象者の回答で次のように用いられていた。

- ・「人と関わる場所である」
- ・「経験をつむ」
- ・「勉強の毎日だ」
- ・「生きるのが辛い場所」
- ・「厳しいところである」
- ・「面倒くさいものだが、属しないと生きていけないので属す」
- ・「大変な場所です」
- ・「お金を稼ぐところ」
- ・「金を得る手段」

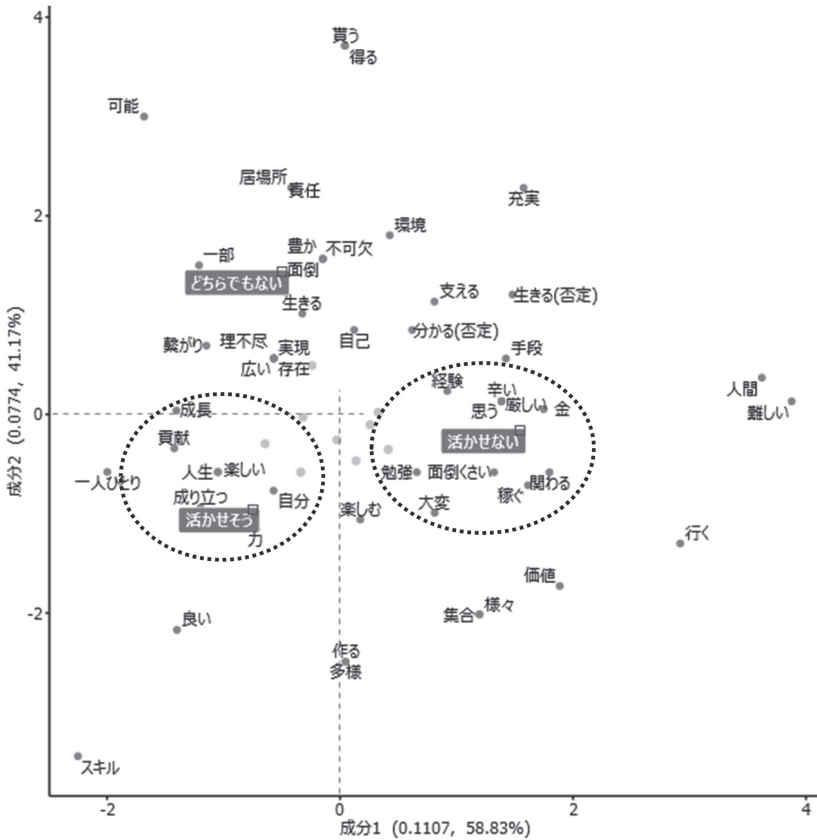


図1 対応分析

注1. 本研究で追加したコードおよび語に太字を施した

4 総合考察

本研究の目的は、第一に、新社会人が社会をどのように捉えているのかについて明らかにすること、第二に、勤務先で能力を活かすことへの自己評価の違いによって社会の捉え方に違いがみられるのか明らかにすることであった。

(1) 新社会人における社会の捉え方

本研究では、先行研究（田澤,2021）のコーディングルールに修正を加え、社会人における社会の捉え方には13種類あることを見出した。具体的には、「成長」「学ぶ」といった能動的な自己変化、「繋がり」といった集合性や関係性、「協力」といった社会を作り出す主体性、「楽しい」といった肯定的評価、「稼ぐ」「職場」といった経済的側面、「ルール」といった自分を縛ったり守ったりする秩序、「辛い」「厳しい」といった社会からの受動的な評価、「難しい」「生きにくい」といった否定的評価、「分からない」といった自己との距離感があることを見出した。

大学生を対象にした先行研究（田澤,2021）と結果を比較すると、新社会人と大学生は、「成長」といった能動的な自己変化、「辛い」といった社会からの受動的な評価の観点から社会を捉えている点では共通しているものの、新社会人になると「稼ぐ」といった経済的な側面で社会を捉えることに特徴がみられた。また、新社会人における社会の捉え方として「楽しい」といった肯定的評価があらわれていた。

(2) 勤務先で能力を活かすことの自己評価による違い

勤務先で能力を活かすことができそうと感じている新社会人は、能動的な自己変化を伴う「成長」、社会を作り出すことへの「貢献」、肯定的評価である「楽しい」という観点から社会を捉えていることに特徴があった。これら3つの語は【肯定】に分類されるコード内のものであった。

一方で、勤務先で能力を活かすことができそうにないと感じている新社会人は、「関わる」といった集合性や関係性、「経験」「勉強」といった能動的な自己変化といった肯定的な観点だけでなく、「稼ぐ」「金」といった経済的側面、そして、「辛い」「厳しい」「面倒くさい」「大変」といった否定的評価の観点から社会を捉えていた。これら9つの語は【肯定】に分類されるコード内のものが3つ、【中位】に分類されるコード内のものが2つ、【否定】に分類されるコード内のものが4つであった。

自己評価が高い場合と、低い場合での【肯定】の語の違いについて解釈すると、自己評価が高い場合は、「成長」「貢献」といったアウトプットが主と

なるような能動的な自己変化であるのに対して、自己評価が低い場合は、「経験」「勉強」といったインプットが主となる能動的な自己変化であるといえよう。新社会人の社会の捉え方の特徴のひとつと考えられる「楽しい」については、インプットというよりも、アウトプットを伴うような活動との関連で出現しやすいのかもしれない。

肯定または否定という次元で社会を捉えた場合、新社会人が勤務先で能力を活かすことの自己評価と連動していた。すなわち、相対的には、能力を活かすことができそうと感じている社会人の方が、勤務先で能力を活かすことができそうにないと感じている新社会人の方よりも社会を肯定的に捉えていた。この結果は、一見すると、学校から社会の移行に伴い、若者が企業社会の秩序や支配的価値観に従順しているという指摘（児美川,2019）を支持する結果とも解釈できる。しかし、勤務先で能力を活かすことができそうにないと感じている新社会人であっても、「経験」「勉強」といったインプットが主となる能動的な自己変化の観点および「稼ぐ」「金」といった経済的側面で社会を捉えていたことは、能力を活かせるようになるまでの将来を見通したうえででの対処であるのかもしれない。この対処を行っているという点で一方向的な従順ではない可能性がある。

ただし、これらの解釈については、本研究がオープンアンサーである文章完成法1項目のみで測定していることの限界もある。たとえば、社会に自分が関与した場合の変化の可能性も含めて測定するなど複数の観点を取り入れて検討するも必要になる。今後の課題としたい。

引用文献

- 川端亮・樋口耕一（2003）「インターネットに対する人々の意識：自由回答の分析から」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』29,pp.162-181.
- 児美川孝一郎（2019）「若者の『自己責任』への呪縛と企業社会への馴化」『月刊全労連』274, pp.1-8.
- 児美川孝一郎（2020）「大学におけるキャリア支援・教育の現在地：ビジネスによる侵蝕、あるいは大学教育の新しいかたち？」『日本労働研究雑誌』716,pp.89-100.
- 樋口耕一（2004）「テキスト型データの計量的分析」『理論と方法』19(1),pp.101-115.

- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版.
- 阪口祐介・樋口耕一（2015）「震災後の高校生を脱原発へと向かわせるもの：自由回答データの計量テキスト分析から」友枝敏雄（編）『リスク社会を生きる若者たち』大阪大学出版会 pp.186-203.
- 白井利明（2008）『フリーターのキャリア自立に関する心理学的研究—時間的展望の視点によるキャリア発達理論の再構築—平成17～19年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書』
- 白井利明・安達智子・若松養亮・下村英雄・川崎友嗣（2009）「青年期から成人期にかけての社会への移行における社会的信頼の効果:シティズンシップの観点から」『発達心理学研究』20(3),pp.224-233.
- 田澤実 2021「大学生は社会をどのように捉えているのか」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』18,91-105.
- 牛澤賢二（2021）『やってみようテキストマイニング：自由回答アンケートの分析に挑戦!（増訂版）』朝倉書店
- 山本寛（2015）「エンプロイアビリティ保障の実証的研究」『日本経営学会誌』36, pp.26-37.

ABSTRACT

How do new working adults perceive society?

Minoru TAZAWA
Osamu UMEZAKI

The purpose of this study is to clarify how new working adults perceive society and to determine whether there are differences in the way they perceive society according to the self-evaluation of their ability utilization at work. We asked 645 new working adults who had graduated from university or graduate school about their views of society and their self-evaluation of using abilities at work. Compared to the results of previous studies with college students, we found that new working adults view society in an economic sense, such as "making money," and in a positive sense, such as "having fun. In relative terms, we found that working adults who felt they could make a difference had a more positive view of society than new working adults who thought they could not make a difference. Previous studies have pointed out that young people are subjected to corporate society's order and dominant values as they transition from school to work. The results of this survey also partially confirm this. However, new working adults who felt that their abilities were unlikely to be utilized in the workplace also viewed society from the perspective of active self-transformation, such as "experience" and "study. These results also suggest that young people may not be one-sidedly obedient to corporate society's order and dominant values.